

『メール (01/04)』

私の苦しみを祈ってくれ
私の為に祈ってくれ
メールを読みながら泣きました
友っていいですね
私の苦しみを
祈ってくれる友って
はじめてなので
他人の苦しみを祈ることが出来る
人は人生の眞の姿ですね

おかしなもんです
オギャーって生まれて
未来が沢山有るどんな
赤ちゃんにでも
決まって有るのは死なのです
どんなに長生きをしようが
息有るものには必ず
訪れてくる掟なのです
どんなに権力の座にしようが
どんなに大金持ちになろうが
路頭に流離う身となっても
死の掟からは逃げることも
出来ないのです

人の苦しみを祈れる人は
死の掟がない永遠なる世界で
幸福というものを掴むのでしょ
この世は限り有るのでしょ
永遠なる世界に住んだ時
幸福になれるかなれないかが
きつと問題なのでしょうね
この世で掴んだものは
死と共に消えてなくなるんです

『孤独 (01/04)』

いつも感じるのです
空しいことをしていると
詩を書くことも
何もならないことを
私はしているのじゃないかと
淋しくなるのです

食事をすることは大事です
でも詩を書いて
小説を書いて
食事とは別個の事なのでしょ

私の書いた物に
いつか光が当たる日が
来るのであろうか
私はいったい何の為に
詩や小説を書くのであろうか

私自身の為に書いて
書かねば生きられないから
だからだから描いている
私の人生はこうだと
知ってもらいたくて
それだけなのです

いつか日が当たるのだろうか
私が胸に描いた世界を
多くの人が理解し
知ってくれるのであろうか
空しく思いながら
書かねば生きられぬ
涙を流して今日も書いて

『霧(もや)(01/05)』

もやにおおわれた
林の木立が
黒く姿を見せたかと思うと
すぐにおおわれてしまいます
落葉の堆肥の小径を
踏み締めて歩くのです
白い霧の気配の中から
小鳥の囀りが
耳に入ってくるのです

森の中はおとぎの国に
なっているのですね
いろんな魔女がもやの
向こうにいて
たぶんいたずらを
しているのでしょう

あつまた姿を現わした
木々の木立と枝葉が
黒ぐろと青々と
みんなみんな濡れていて
私の衣服はもう霧を沁み込んで

濡れています
魔女さん魔女さん
この霧をいつ晴してくれるの
魔女さん魔女さん

『いいしれぬ(01/06)』

胸に押し寄せてくる
言葉の無い心よ
ひいては押し寄せる
海原のごとき形の無い
私の心よ
今日もまた私を包んで
どうしようというのだ

胸に有っても
言葉に書けない心よ
語るにも言葉が無い
いいしれぬ心
涙を流すことなく
引いては押し寄せる
言葉の無い思い

手を伸ばして掴もうにも
指の間から抜けていく
大海原の流れ
いいしれぬ
いいしれぬ
言葉のない私の心
語るにも術がない悲しい心

『寒の月(01/07)』

夜空に星が煌々と瞬き
寒の月に照されて
静かに眠る街並みは
冬の冷たさに佇んでいる

幾時を歩いても
胸の切なさは消えず
人のいない通りに
震える心が響いて行く

凍てつく風が
私の一人身を
痛み吹き抜き

心は氷の涙

幾時を彷徨いても
生きる遣る瀬無は
消えることなく
思いが灯火するのみ

震える歩みを止めれば
池に冬の月が佇んでいる
さざ波に月が揺れ
私の思いが波打って行く

『睦月の花 (01/25)』

空は遠く澄み
セブリアン・ブルーの
空の下で
冷たい風に吹かれた
胡蝶蘭の
白い白い花ビラが
睦月の空には
お似あいなのです

冷たい夢と寒い心に
胡蝶蘭の花が
目に焼きついて
焼きついて
いつまでもいつまでも
睦月の風の中で
白い白い花ビラが
瞳から消えないのです

春を待つ温かな希望を
胡蝶蘭の花は
柔らかく包んで
隠しているのでしょうか
温かい夢を
春風に乗せようと
睦月の風の中で
一心に咲いています

End all 1995/01

End all 1995/11

『鎮魂詩 (02/09)』

―沈黙の町―
ゴウーという地鳴りを
始めて知りました
本が次から次と落下し
食器が放り出され
床へ箆笥まで倒れてきました

私は必死で手を上げる
町へ行かなくちゃ
トラックの運転手が
こりゃーもう行けません
と絶句したまま……
私は走った
目に入る光景は
電柱が倒れ電線が切れ
家々が潰れ
ビルが崩れ火炎を上げている
私は夢を見ているのだ―
これは映画の世界なのだ！
人が血だらけで町を走る
幾人も幾人も

火炎が追いかけてくる
地面がまた揺れる
裂けた道
倒れてくる瓦礫
これは映画なのだ！
私は夢を見ているのだ！

真っ青な人の逃げ惑う
声も匂いも
炎の激しい雄叫びの吠えも
走って走って人と人の
呼合う声も
余震の度に崩れ落ちる
家屋の音も
私にはまるで沈黙の光景を
見続けているのです
沈黙の像が瞳に映っているのです
聞こえますか
人の悲鳴の渦をその叫びを
あなたは語れますか
一瞬にして沈黙した町の
その大地が声が聴こえますか

『如月未明 (02/12)』

夜明けの地平線が
真っ赤に染って
暗闇が明かりだしてくる
遠く幾本もの鉄塔が
次から次と姿を現し
空中を走る電線が映える

地上の樹木が白明の中で
黒い塊となって浮かび
小鳥の囀りと共に
ぐいぐいと緑色を見せてくる
冷たい大気が中で
空と地上が姿を取り戻した
真っ赤に燃える太陽は
巨大な火球となって昇り出し
白明の世界を眩しく照し
空も地上も宇宙に戻している
オレンジ色に映える樹界も
オレンジ色に映える都会も

『冬野 (02/15)』

彼は彼方へと旅立って行った
生きた社会の冷たさに目を向け
星空を見上げる野原にて
彼方へと旅立って行った
大地に屍を跡として
一匹の動物が旅立って行った

『陽炎 (02/15)』

私が途方に暮れて
佇んでいると
死が訪れてくるのを
感じ取った
彼は私から苦悩を
彼は私から悲しみを
解き放して
彼は私の理想郷へと
その旅立ちへ誘う

佇み暮れている私へ
彼は叫んだ
勇気を出して飛んでみると

苦しみも悲しみも一瞬に
無くなるから
人間でいることが一瞬に
消えるから
勇気さえ出せば
凡ては安らぎへと旅立てるのだ

途方に暮れて佇んでいると
死がそこまでやってくるのがわかる
彼は言う

さあ勇気を出せば
束縛から自由になれるのだと
人間からも自由になれるのだと
でも私には勇気が無かった
人間でいる束縛から
私を解き放せなかった

『黄昏 (02/17)』

むせび泣く私の心よ
なぜにそんなに悲しいのか
人生のせつなさに触れて
生きることが恐ろしくなったのか
人であることが堪らないのか

人はみなやるせなさを
耐えて生きている
虫の様に死の瞬間まで
人もまた知らずに生きようとする

むせび泣く定めき私の心よ
運命をしっかりと受け止めて
さあ黄昏の野原へ
生きのやるせなさを咲かせよう

人はみんな人生の中で
愛し合い悲しみ合い
互いに淋しさを抱合いながら
人生を歩いている

むせび泣く私の心よ
人間でいることが堪らないのなら
さあ思い切って
愁いを捨てて黄昏へと旅立とう

お前の心の中に
もしも勇気があるのなら

野原の中へ黄金を咲かせるのか
黄昏へと旅立つのか
むせび泣いている私の心よ

『街景 (02/17)』

遠く平野の一角に
群集している町が見える
上空に広がる黒雲で覆われ
畑が見え森が有り
川が蛇行している

人が生きるって群集なのですね
一人では生きられないのですね
人間に於ける人間の社会は
人間主義じゃないといけないのですね

遠く群れ佇んでいる町は
昼の暗い街並みは
赤青黄色と
どぎつい明かりを灯し
激しい雨に打たれています

『鎮魂詩 二 (02/21)』

―妻―
夜の十一時を過ぎても
この子は吸い続けた
いったいどうしたのだろうか
乳首が切れて血が滲み出ても
一心にこの子は吸い続けた

―早朝―
大地が吠える震音とともに
二階が潰れてくる
妻を外に引きずりだし
夫ははいつくばって
潰れた家へと戻って行った

―夫―
私が見たのは
ベットが潰れ無傷の床板に
昨夜オツパイを吸い続けた
赤ん坊は潰されていた
次のまでは上京した妻の母が
長男を覆うように
二人とも息が耐えていた

―妻と夫―
「なんなこれ」
言葉を覚え立てた長男の
声を聞いたような気がした
瓦礫と火炎が迫る白昼の中で
錯覚視聴が悲しく狂う

―大地よ―
芦屋市の九番地は
一夜開けたら十人が亡くなった
その大半が
子供と赤ん坊である
大地よ人の哭嘆を聞け
大地よ人の悲しみを聞け
なぜ助けなかった！

『俳優 (02/26)』

ライトを浴びた人間は
その魅力に人生を縛られると言う
悲しい路と寒い路と知っても
孤独と言う荷を背負って歩むと言う
男も女ももう幾人歩み死んで行った
ぞーっとする舞台の路を

歩き切るほど人間は強くはない

照明に光る彼女の青い顔は
眠りたいと語っている永久に眠りたいと
哀れな人生を選んだ遣り切れなさか
悪魔に魂を売った苦しみか
彼女の語る台詞の息づかいに
人の悲しさが聞こえてくる
生きる悲鳴が聞こえてくる

彼女は気づいている
舞台が永遠ではないことも
人生がライトを浴びる事でないことも
唇をかみしめて
愚かな生き方を見せねばならない姿が
舞台でライトを浴びて演じている
哀しい淋しい孤独な人生を隠して

男は知っている
舞台のライトが悪魔の光であることを
人間を魅了し引き寄せ続け
その生血を吸うのが舞台であることを
さようならをしようとしても

男がもう逃げられないことを
観客の誰もが彼の悲しい人生を堪能し
ている

舞台のライトを浴びながら
上手から下手へと人生を歩き切るほど
人間は強くはない
「Charlie Chaplin」もそうであったし
「John Wayne」もそうであった
「Bergit Nilsson」もそうであったし
「King Lear」がまさにそうであろう

『雪』(02/27)

冬はどうして
淋しいものなのでしょう
人生が吹雪に
さらされるからだろうか
人生が寒さに
震えるからだろうか
冬に人生の凡てが
表現されるからなのでしょう
炬燵(こたつ)などの暖房が有っても
家族の温もりがないと

やりきれないのでしょうね
コンコンと降っている雪は
父と母へは子供の頃の憧憬を訪れさせ
子供たちへは思い出を刻ませている
冬は淋しいから
冬は心に温もりを運ぶから
だからだから
コンコンと降ってくる雪を
雪に積もった町並みが
いつまでもいつまでも
人生から消えないのでしょうか

End all 1995/02